

いわゆる「可能性想定」を表わすモダリティ副詞の史的変遷 —— モシカスルト類・ヒョットスルト類・コトニヨルト類を対象に ——

小池 康

1. はじめに

本稿は、小池（2002 a, b, 2003）において提示した、いわゆるモダリティ副詞の明治期以降における変遷過程の解明およびそのモデル化を目指す研究の一環として、モシカスルト・ヒョットスルト・コトニヨルト、およびこれらの変異形に関して考察しようとするものである。

まず、これら各語の意味および相互の関連性について見た後、明治期以降の小説の用例より、各語にどのような出現傾向が見られ、また共起する形式にどのような変遷が見られるのかということに関し分析・考察する。

2. 対象副詞

本稿で対象とする副詞（以下、対象副詞と呼ぶ）のモシカスルト・ヒョットスルト・コトニヨルトには、それぞれモシカシタラ・モシカシテ／ヒョットシタラ・ヒョットシテ／コトニヨッタラ・コトニヨレバなどの変異形が認められる。しかし、本章ではひとまずこれらの変異形相互の違いは考慮せずに、モシカスルト類・ヒョットスルト類・コトニヨルト類として話を進めることにする。

本稿ではモダリティを、小池（2002 b）に準じ、「発話時における、命題に対する話し手の主観的な判断・態度を表わすカテゴリー」と定義しておく。そして、それが副詞として具現化したものを「モダリティ副詞」と、また、主に文末の助詞・助動詞などの形式として具現化したものを「モダリティ形式」と呼ぶことにする。

それを踏まえた上で、対象副詞は「一種の副詞として機能し、それが文の認識的意味やモダリティに関与していることは、従来、一般的に認められている

事実だと言ってよいだろう」とする宮崎（1997）の指摘を受けて、本稿でも対象副詞をモダリティ副詞と見なすことにする^[**]。

対象副詞の意味・機能については、先行研究において、主にモシカスルト類とヒョットスルト類に言及したものが多く見られる。そして、この二類を類義の関係として扱っているものが多い。

この二類の意味・機能に関する先行研究においては、まず杉村（1998）で指摘されているように〈命題成立の可能性が「低い」ことを表わす〉という見方（たとえば森田1989、森本1994、工藤2000など）と〈命題成立の可能性を仮定する〉という見方（たとえば宮崎1997、杉村1998、和佐2001など）がある。後者の立場での研究、たとえば宮崎（1997）では、それまでの研究（すなわち〈命題成立の可能性が「低い」ことを表わす〉という見方での研究）では扱いきれなかった、モシカスルト類が疑問文と共起するという問題を、「（命題成立の）可能性の想定」（宮崎1997）という見方を導入することにより説明しているなど、より統括的な分析がなされていると思われる点で、本稿では後者の見方・立場に準じることにする^[**2]。

コトニヨルト類は、宮崎（1997）らの研究では扱われてはいないが、島本編（1989）などでモシカスルト・ヒョットスルトと類義として扱われていることなどから、本稿でも分析対象とすることとした。

以上のことより、本稿では、モシカスルト類・ヒョットスルト類・コトニヨルト類を、宮崎（1997）に準じて「可能性想定 of モダリティ副詞」と呼ぶことにし、以下考察を進める^[**3]。

さて、以上は現代語研究の枠組みの中での対象副詞の意味・用法であったが、明治期においても現代と同様であったのかどうかについて、確認しておかねばなるまい。

明治43（1910）年刊の『日本類語大辞典 第三版』によると、対象副詞のうち立項されている副詞はコトニヨルトだけであった^[**4]。

コトニヨルト【依事】

（事の様子に依りては）。ともすれば。ひよつとすれば。やもすれば。

俗 もしかすると。わるくすると。わるくしたら。ひよつとすると。

（下線は筆者、以下同）

また、モシという項には以下のような記述が見られる。

モシ【若】

(前程を慮りていふ言葉)。もしや。もしも。あるひは(戒)。俗ひよつと。もしか。もしかすると。ひよつとして。ともすれば。ひよつとしたら。ややもすれば。ひよつとすると。ややもせば。ことによると。

このことより、まずモシカスルト類やヒョットスルト類は、明治期においては「俗語」として意識されていた可能性が考えられる。しかし、それよりも重要なことは、対象副詞にそれぞれ類義関係を認めていることである。この点で、対象副詞は明治期においてすでに意味的に類義関係にあると認識されていたと考えておく。

3. 資料

本稿における資料は、小池(2002 a, b, 2003)に準じ、明治期から現代までに発表されたいわゆる大衆文学(大衆小説)を中心に選定した。

また、分析の便宜上、松村(1998)を参考に、選定作品を以下の四つに時代区分することとした^[*5]。

- 明治期：明治21(1888)年から明治45・大正元(1912)年の23年間
- 戦前期：大正2(1913)年から昭和20(1945)年の32年間
- 戦後期：昭和21(1946)年から昭和48(1973)年の27年間
- 現代期：昭和49(1974)年から平成12(2000)年の26年間

資料は、49名の作家の68作品である(資料に関しては本稿末に記載)。資料は、基本的に作品の初版本とし、入手できなかった場合には全集などを用いた。

4. 対象副詞の出現傾向

調査の結果、モシカスルト類は180例(対象副詞の56.25%)、ヒョットスルト類は100例(同31.25%)、コトニヨルト類は40例(同12.50%)見られた。

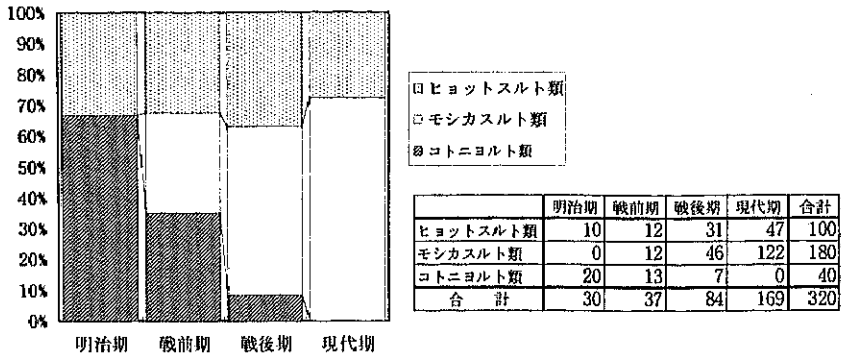


図1 対象副詞の出現傾向

図1より、以下のことが言えるであろう。

1. ヒョットスルト類が、全時期を通じて30%前後の割合を占めている。
2. モシカスルト類は明治期に、コトニヨルト類は現代期において、用例が見られない。
3. モシカスルト類は、戦前期以降、占める割合が増加しているのに対し、コトニヨルト類は時代が下るにつれ減少傾向にある。

以上のことより、本稿の調査では、モシカスルト類は戦前期より使われはじめ、時代が下るにつれコトニヨルト類と交替していったかのような様相が認められる。この意味で、モシカスルト類とコトニヨルト類は対照的である。

ここで、モシカスルト類に関して留意しておかなければならないことがある。それは、明治期においてはモシカスルトやモシカシラといった〈モシカ+動詞スルの活用形(過去形も含む、以下同)+助詞〉の語形では用例が見られなかったが、モシカやモシヤという語形では使われていたということである。

図2は、モシカスルト類の変異形(白地もしくは網掛け)およびモシカ・モシヤ(線模様)の時期別での出現傾向を示したものである^[46]。

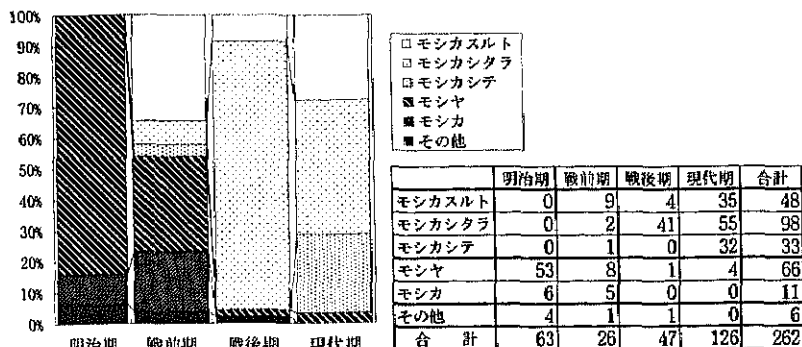


図2 モシカスルト類の変異形の出現用例数の推移

これによると、モシカスルトは戦前期に、モシカシタラは戦後期に、そしてモシカシテは現代期において比較的多く用いられるようになったことがわかる^[*7]。ちなみに、本稿での資料の中で、最初に〈モシカ+動詞スルの活用形+助詞〉という語形での用例が見られたのは、菊池寛の「第二の接吻」(1925)であった^[*8]。

(1) 此の宏壯な建物も、若しかすると、抵当には入つてあるかも分からない。(第二の接吻9上)

ここで、モシカ・モシヤとモシカスルト類の関係について触れておこうと思う。

宮崎(1997)には、モシカが単独で用いられる場合、「モシカスルト」類^[*9]と同様、引用節や終止節にも出現する場合はあるが、「基本的には仮定条件節内で用いられ」、「心内での思考を表す用法」が中心である、と述べている。

また、本稿での戦前期にあたる昭和18(1943)年刊の浅野(1943:590)では、モシカスルト類では項目立てされておらず、モシカおよびモシヤが立項されている。

モシカ

別語「ことによると」「ひよつとしたら」「どうかすると」などの意で、物事のやゝもすれば豫想に反するさまにいう。

モシヤ

□ (一文字欠落；筆者注) 略「もし」に同じいが、やゝ趣を異にして「ひよつと」とか「どうかして」とか、物事の萬が一にも變ることのなきやを心配するときの語。「もしか」ともいふ。

モシヤの語釈にあるモシには、「物事を假にたとへていふ場合の語」(p. 590) という語釈が与えられている。

これらの語釈より、モシヤは、一方でモシと類義関係にあると共に、もう一方でコトニヨルト[*10]やヒョットシタラと類義であるモシカとも類義関係にあると認識されていたことが伺える。前者は仮定条件の用法で、後者は可能性想定の用法と見なせるのではないだろうか。

図2でのモシカ・モシヤは、意味的に「可能性想定のモダリティ副詞」と見なせるものを対象とし、仮定条件で用いられているものは除外した[*11]。具体例は以下のようなものである(〈 〉内は筆者の注を示す、以下同)。

- (2) 『へエ實は今此處へ持つて來たんですが、若しか且那は最早疾に御承知じやあるまいかと思つたもんですから。』(錦木155上)
- (3) 「そんなら、お前様若しか、若え書生様見かけ無かつたけい？」(コブシ305上)
- (4) それとも……〈夫は〉若しや、人種が違ふと云ふので〈私に〉忌氣がさしたのではあるまいか。(無花果401中)
- (5) 「宅の且那様は借や這裡へ被入りは致しませんで爲たらうか」(續金色夜叉141)
- (6) 他の二人は誰であらうか、玄關の俵は此の人達のゝに違ひないが、若しや東吾の親達ではあるまいか？(魔風戀風278上)

このようにモシカ・モシヤは、モシカスルト類と類縁的な関係にあると考えられる。しかし、本稿ではひとまず語の構成が〈モシカ+動詞スルの活用形+助詞〉を取るものに限定して、考察を進めることにする。モシヤ・モシカに関しては、必要に応じて触れるにとどめる。

5. 共起形式の傾向

対象副詞がどのような形式と共起しているかを見てみると、主に以下の形式に分かれる。

- a. カモシレナイ^{〔*12〕}
- b. (ノ) デハナイカ^{〔*13〕}
- c. 言いさし・一語文

a のカモシレナイは、「可能性がある」(岡本編1944, 益岡・田窪1992, 三宅1995, 宮崎1997, 庵2001, 宮崎ほか2002など)ことを表わすとされるモダリティ形式である。中でも、三宅(1995)では、「可能性判断」と命名し、命題成立の可能性が高いとか低いとかという認識ではなくて、「命題が真である可能性がある」すなわち「一つの可能性として真である」という認識のことを指すとしている。

そのような(一つの)可能性を想定するという点で、カモシレナイは対象副詞の持つ(可能性想定)と共通した意味を持つモダリティ形式であると言える。

- (7) 「もしかすると, これがお前の出世の緒 かもしれないよ。(東京行進曲182上)
- (8) いや, ひょっとして 信利もそれを考えている かもしれない。(恍惚の人197)
- (9) 今突然^こ此へ来たのは殊に依ると 淺山さんの差圖 かも知れません。(小猫226)

b の(ノ) デハナイカは、田野村(1990), 仁田(1991), 宮崎(1997), 安達(1999), 宮崎ほか(2002)などでひとつの形式として取り上げられ、分析が行なわれている。

このうち、宮崎(1997)では、(ノ) デハナイカを「話し手が発話時に行っている情報形成の過程を表示する形式」^{〔*14〕}と規定している。そして、「疑いの文」^{〔*15〕}との対比で、「命題が成立する可能性を想定する」疑いの文^{〔*16〕}の場合には(ノ) デハナイカが用いられるとしている。さらに(ノ) デハナイカは、命題の真偽に関して、疑い、迷っているという段階ではなく、「真であると仮

定しながらの推論であり、命題は話し手の仮説として提示されている」と述べている。また、カモシレナイとの対比の中でも、(ノ)デハナイカは「当該命題を真である有力候補として提示する」^{1*17)}ものである点で、カモシレナイとは異なると見ている。

このように、(ノ)デハナイカは、命題が成立する可能性を想定する疑いの文に用いられ、考うる可能性の内の一つを「有力候補」として想定しているという点では、〈可能性想定〉のモダリティ形式として見なしうるものと言えるだろう。その意味で、(ノ)デハナイカは、カモシレナイと完全に意味が合致するわけではないが、カモシレナイと同様に「可能性想定 of モダリティ形式」と言いうるものと考えられる。

このように、(ノ)デハナイカの基本的な意味を〈可能性想定〉とした上で、本稿での調査結果を見てみると、大きく二つの用法に分類されるものと思われる。

ひとつは、〈断定するには不十分な情報しか得ていないながらも、真である可能性がある」と話し手が想定した判断を提示する)用法で、結果的に〈推定^{1*18)}、疑念・懸念〉などと言いつわられるような意味を導き出す用法である。

- (10) あなたは違ったわ。〈中略〉だから、もしかしたら、年上の人と長く付き合ったことがあるんじゃないかと思ってた。」(なんとなく、クリスタル78)
- (11) これには何か隠された理由がありそうな気もする。ひよっとすると、思い出したくないようなことが、あまりにも沢山あって、そのために周囲の部分もほやけてしまっているのではあるまいか。(旅の幻燈6)
- (12) もしかしたら銀ちゃんは〈待ち合わせ場所に〉来ないのではないかという心配が、その暮色のように迫り、芳子は、昨夜銀ちゃんのアパートへ転がり込んで行った時の、銀ちゃんの迷惑そうな顔を改めて思い出した。(土曜夫人174上)
- (13) 侯爵様やお姉様は、どうしてこんなにお情深いのでせう。あんまり勿体ないやうで、ひよっとしたら私、夢ぢやアないかと思はれますの。(乳姉妹145下)

この「真である可能性がある」と話し手が想定した判断」は、話し手が当該命題が真であってほしいと思う(願う)こととは別である。特に当該命題が真で

あってほしくないという場合には、〈疑念・懸念〉の意味になる場合が多いように思われる(例12,13)。ただし、〈推定〉も〈疑念・懸念〉も明確に境界線が引けるわけではないので、本稿では以後〈推定〉に代表させることにする。

(ノ) デハナイカのもう一つの用法は、〈話し手が真である可能性があると想定した判断を、不十分な情報しか得ていないゆえに相手へ問いかける〉用法である。これは〈質問^[*10]〉と名付けうる用法である。例としては、以下のようものが挙げられる。

- (14) また、早良^{さわら}氏の名がペンネームであるのか本名なのか私は不勉強で知りませんが、もしかしたら荒木孝志というお名前ではありませんでしょうか？(緋い記憶208)
- (15) トキ子と市川松江とは思わず顔を見合わせた。(ひよつとすると私達のまだ見たことのない恋愛つていうものに山田さんがとりつかれたのじやないかしら？)(さあ……) といったような無言の会話をその目と目が交わっていた。(地底の歌250上)

これらの二つの用法は、宮崎(1997)が言う「当該命題を真である有力候補として提示する」用法から派生したものと考えられる。なぜなら、〈推定〉は話者が真であると想定した「有力候補」を提示したものであり、〈質問〉はこの「有力候補」を真と見なすことに関して、相手に問いかけていると言えるからである。

(ノ) デハナイカ以外で終助詞カを含む形式も見られた。主に、カ(例16-18)^[*20]、未然形+ナイカ(例19,20)という形式である。

- (16) 「じゃ、もしかして、こんな時間に病院に連れていくのは迷惑でしたか。(女たちのジハード390)
- (17) ひよつとすると、あれがいわゆる性愛の絶頂感というものだったのだろうか。(熟れてゆく夏109)
- (18) ことによったら、冬太郎にもある程度打ちあけて、一しよに浜子をさがしてもらおうかと思っている普枝に、彼は両手の人さしゆびでちゃんばらをしてみせ(後略)(雑居家族140下)
- (19) 「でも萬一^{ひよつと}したら癒^{なほ}らずにしまひはせんか^{さう}と、其様時々思ひますの。(不如帰60下)

- (20) 事によると詐欺の告訴でも爲れやせんかといふ話も有るよ。」(生さぬ仲96下)

カは、本稿での(ノ)デハナイカの〈質問〉(例16)や〈推定〉(例17)に近い意味・用法を持つ。ただし、例18のように、〈ひとりだけの志向〉(吉川1969)の意味の場合もあり、この場合は(ノ)デハナイカとの共通性は見られない。

また、未然形+ナイカも、(ノ)デハナイカに近く(宮崎1997)、〈推定〉の意味を持つ。

なお、以後本論文では、特に言及する場合を除き、(ノ)デハナイカ以外でカを含む形式を「その他のカ類」と呼ぶことにする。

対象副詞と共起する形式cの言いさし・一語文とは、いずれも共起形式が出現していないものである。言いさしは、例21,22のように“……”を使用することで、何かを言おうとしたのだが言えないもしくは言わないという感じを表わしていると思われるものを指す。また、一語文は、例23のように対象副詞が一語で用いられたものを指す^[*21]。例22は、一語で用いられているが、“……”があることから、言いさしと見なす。

- (21) —— ひょっとして修ちゃんでは……まさか。(受け月116)
 (22) 「又裁判事件が起るんぢやありませんか。」「事に依ったら……」と、
 亮輔は團扇で膝頭を叩きながら～(生さぬ仲58下)
 (23) 「でも、もしかすると。」 「もしかすると、何？」 私はずねた。
 (アムリタ210)

図3は、以上の各形式が、モシカスルト類とどのくらいの比率で共起しているのかを示したグラフである。なお、図3においては、終助詞カを含む形式((ノ)デハナイカおよびその他のカ類)は網掛けを施し、違いをその粗密で示した。

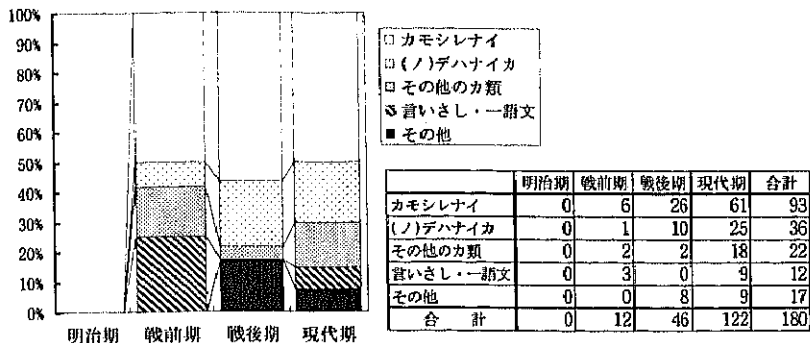


図3 モシカスルト類の共起形式の推移

図3を見ると、モシカスルト類の共起形式としてはカモシレナイが50%前後の比率を占めていることがわかる。しかし、その他の形式については、時期による変動が激しく、一概に傾向といったものは認められない^[*22]。

さて、ここで留意しなければならないことがある。先に述べたように、モシカスルト類は、特に明治期においてモシカ・モシヤという形式でのみ出現していたということである。

表1 モシカ・モシヤ等の共起形式の推移

	明治期	戦前期	戦後期	現代期	計
カモシレナイ	1	0	0	0	1
(ノ)デハナイカ	29	6	0	0	35
その他のカ類	22	4	0	2	28
言いさし・一語文	11	4	1	2	18
合計	63	14	1	4	82

モシカ・モシヤの共起形式を見てもみると表1のように(ノ)デハナイカとその他のカ類が、明治期で合わせて51例(80.95%)、戦前期で同じく10例(71.43%)を占めており、モシカスルト類に見られたカモシレナイは明治期に1例見られるのみであった。

ちなみに、(ノ)デハナイカの意味別の用例数について、モシカスルト類とモシカ・モシヤとで比較してみる。まず、モシカスルト類は、以下の通りであった。

戦前期（1例）…〈推定〉

戦後期（10例）…〈推定〉：9例、〈質問〉：1例

現代期（25例）…〈推定〉：21例、〈質問〉：4例

また、モシカ・モシヤは、以下の通りであった。

明治期（29例）…〈推定〉：22例、〈質問〉：7例

戦前期（6例）…〈推定〉：3例、〈質問〉：3例

これを見ると、モシカ・モシヤの戦前期を除き、(ノ)デハナイカは主に〈推定〉の用法で用いられていたと考えられる。

このように、共起形式から見る限り、モシカ・モシヤとモシカスルト類との間には違いが認められる。この点に関しては7.1にて触れる。

次に、図1でモシカスルト類とは対照的に、明治期以降、漸次、減少傾向の見られたコトニヨルト類に関して見ておく。

表2 コトニヨルト類の共起形式の推移

	明治期	戦前期	戦後期	現代期	計
カモシレナイ	9	5	3	0	17
(ノ)デハナイカ	3	1	1	0	5
その他のカ類	2	0	1	0	3
言いさし・一語文	3	5	0	0	8
その他	3	2	2	0	7
合計	20	13	7	0	40

表2より、明治期における共起形式は、全20例中9例（45.00%）がカモシレナイであった。その後も、カモシレナイとの共起が出現用例数中のほぼ半数を占めているが、全体的に出現用例数自体が少ない^{〔*23〕}。

ヒョットスルト類は、図1より、時期にかかわらず30%前後の割合を占めていた対象副詞であった。図4より、戦前期以降、カモシレナイと共起した用例が50%以上の割合を占めていることがわかる。また、(ノ)デハナイカは、特に現代期に至って全体の4分の1強を占めている^{〔*23〕}。

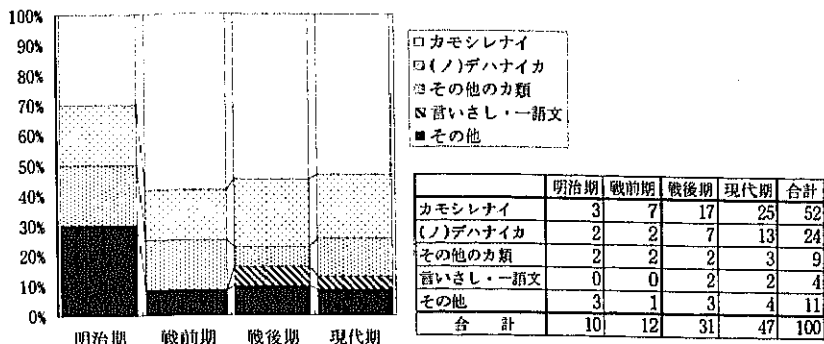
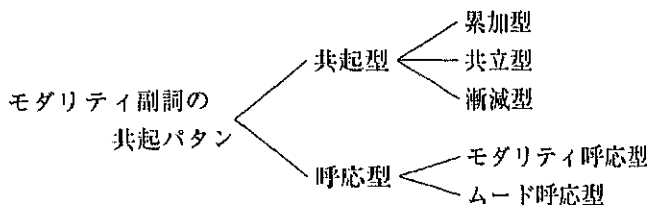


図4 ヒョットスルト類の共起形式の推移

6. モダリティ副詞の共起パターンにおける位置づけ

さて、本章では、前章の結果を踏まえ、対象副詞が小池（2002a, b, 2003）におけるモダリティ副詞の共起パターンにどのように位置づけられるのかに関して考察する。

モダリティ副詞の共起パターンとは、以下のような体系をなすものである^[*25]。



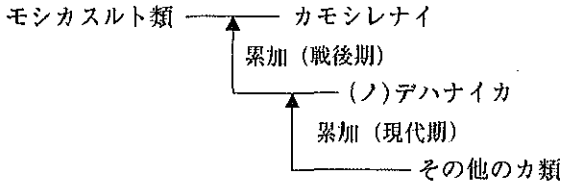
各型にどのような副詞が該当するのか等については先行研究を参照してもらうこととし、本稿では対象副詞に関連がある型について、適宜説明を与えることとする。

まず、モシカスルト類は、戦前期より多く見られるようになった形式なので、戦前期以降を対象とする。図3より、戦前期においては、相対的にカモシレナイと共起した用例が多く見られ、戦後期・現代期となるに至っても、カモシレナイとの共起が中心的であると言える。そして、戦後期より（ノ）デハナイカ、

さらに現代期になるとその他のカ類といった形式とも共起するようになったことが認められる。

このことを、図示すると、以下のようになろう。

図5 モシカスルト類の共起形式の変遷



このように、モシカスルト類は、時期の変遷に伴い、共起する形式が段階的に増加していると言える。その点で、上記の共起パターンにおける「累加型」のモダリティ副詞として位置づけられる。

「累加型」は、小池 (2002b) によれば「ある一つのモダリティ (形式) と共起する割合が高かったものが、時期の変遷に伴い、他のモダリティ (形式) とも共起するようになっていくタイプ」^[*26]のことであり、モシカスルト類はまさしくこの「累加型」の副詞と見なせそうである。

次に、ヒョットスルト類は、モシカスルト類と比較すると、飛躍的に用例数が増加したという傾向は認められず、また各時期における用例数も少ないので、一般化するのは危険なのであるが、本稿での調査結果ということであえて示せば、以下のようになろう。

図6 ヒョットスルト類の共起形式の変遷

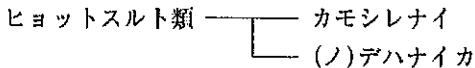


図4を見ると、特に戦前期以降、カモシレナイと(ノ)デハナイカの割合は安定していると言える。その他のカ類については、一見するとある程度の比率を占めているように見えるが、実際には全体でも9例しか見られなかったので、図6では除外した。

ヒョットスルト類の場合、モシカスルト類のように時期の変遷によって共起形式が累加しているといった傾向は(本稿での調査結果からは)認められず、

特に戦前期以降は時期の変遷にかかわらず、カモシレナイと(ノ)デハナイカがほぼ一定の割合で出現していると言える。

小池(2002b)によると、このように「時期の変遷にかかわらず、複数のモダリティ(形式)が一定の割合で共起するタイプ」の副詞を「共立型」の副詞としている^{〔*27〕}。

コトニヨルト類は、ヒョットスルト類よりもさらに用例数が少ないのでここでは図示しないが、5章での表2よりカモシレナイと共起する傾向が相対的に高かったと言える(7.2参照)。

7. モシカスルト類に関する考察

本章では、対象副詞のうち、出現用例も多く、また特徴的な使用傾向を見せたモシカスルト類に関して考察する。

7.1 モシカスルト類はなぜ確立したのか

本節では、なぜモシカやモシヤはそのまま安定せず、モシカスルトを始めとする〈モシカ+動詞スルの活用形+助詞〉という語構成を持つ形式が使われるようになったのかについて考察する。

4章において、本稿での戦前期にあたる昭和18(1943)年刊の浅野(1943)の記述より、特にモシヤには、二つの用法—すなわちモシと類義関係にあると想定できる〈假定条件〉の用法とコトニヨルトやヒョットシタラと類義関係にあると見なせる〈可能性想定〉の用法—があることを述べた。

モシに関しては、本稿における明治期においてもすでに假定条件節での用法が見られ、この用法でのみ使用されている。

- (24) 自分は思つた、^若生きて再び娑婆に出たら、何様な方法何様な手段でもして、未決監の囚徒に運動、空氣、日光、清潔を與へたい。(寄生木 213)

ところが、モシカ・モシヤは、上述の通り〈假定条件〉の例(例25,26)もあれば〈可能性想定〉の例(例27,28および4章での例2から例6)も見られる。

- (25) 夫れだのに若しか詰らない事^そで出るの^と入るの^{つて}事でもありや、挽回^{とりかへし}の附かない事になるんだから、何でも眼を瞑^{つぶ}つて居るに限るのよ。(女夫波285上)
- (26) 民田は深く少年の事を知らざれば何とも喙^{くちばし}を容れ難し「それが一番上策で御座います、私も委^{まか}しい様子を知らないのですから若しや推察が違ふと實にお嬢さんにもお氣の毒です、(小菟419)
- (27) 「それに、(兄の政男は) 今迄は、金錢に關してなんぞ、彼此^{かれこれ}云つた事なんぞ一遍も無いのに、今日に限つて那樣^{あんな}な答な……。」竹盛を覗く様にして、「若しか、歸省した時に何か……、事件でも起つたんぢや^{ない}無いでせうか？」(コブシ362上)
- (28) (庸之助は) 眼^{めやに}を拭いて見返しても、何うも白い物がふらふら動いてるやうな氣がしてならぬ、若しや、お澤の幽靈ではなからうかと、斯う思ふと、それがいたく心かかりで、(後略)(無花果430上)

このようにして見ると、〈假定条件〉という用法において、モシとモシカ・モシヤは併存していたことになる。そして、そのような競合状態の結果、〈假定条件〉を表したい場合には、〈假定条件〉の用法しか持たないモシが負うようになっていったものと思われる。なぜなら、モシが〈假定条件〉の用法しか持たないという認識が定着していたとするならば、あえて〈假定条件〉と〈可能性想定〉といった複数の意味を持つモシカ・モシヤを用いるよりも、假定を表わしたいという表現意図がより単純明快に表わせるからである。

一方のモシカ・モシヤは、すでに〈假定条件〉と〈可能性想定〉とが兼ね合わさっているという認識が確立していたため、新たに〈可能性想定〉だけの用法を持つ表現が求められたのではないだろうか。それにより、モシカスルト(類)という表現が使われるようになっていったのではないだろうか^(*)26)。

このようなモシカ・モシヤからモシカスルト類への移行は以下のようなデータからも推察できる。たとえば、図3および表1より、戦前期において、モシカ・モシヤは14例、モシカスルト類は12例とほぼ半々の割合となっている。この戦前期の前の明治期ではモシカ・モシヤは63例なのに対し、モシカスルト類は用例がなく、逆に、戦前期の後の戦後期ではモシカ・モシヤは1例なのに対し、モシカスルト類は46例あるというように、この戦前期がモシカ・モシヤからモシカスルト類へ移行した時期である可能性が高いと言える。

また、これは共起形式の面からも認められることで、特にモシカ・モシヤの

共起形式として特徴的であった(ノ)デハナイカおよびその他のカ類との共起用例数を見てみると(図3および表1参照)、以下のようになる。

明治期…モシカ・モシヤ：51例、モシカスルト類：0例
 戦前期…モシカ・モシヤ：10例、モシカスルト類：3例
 戦後期…モシカ・モシヤ：0例、モシカスルト類：12例

このように、モシカ・モシヤに特徴的であった(ノ)デハナイカとその他のカ類は、戦後期において、モシカスルト類に移行していった様相が伺える。

そして、図2より、新たな形式モシカスルトの〈モシカ+動詞スルの活用形+助詞〉という語構成より、モシカシタラや(特に現代期に至って)モシカシテのような、同じ語構成を持った表現が使用されるようになったものと考えられる。

しかし、特に現代期においてモシカシテが多く用いられるようになっていることは、特異な傾向と言える。なぜなら、モシカシテは〈可能性想定〉(例29)と共に〈假定条件〉(例30)の用法も認められるからである。

- (29) 妻はまだ気が付いていないのだ。久木はそう思いながら一方で、もしかして妻はすべてお見通しなのかもしれないと思う。(失楽園95)
- (30) もしかして親父が生きてたら、同じように仲居の手から下着を奪いとって同じ目をして洗ってくれたかもしれない、ふっとそんな気もしたが、慌てて首をふりその考えを否定したよ。(悉文109)

7.2 モシカスルト類はなぜ浸透していったのか

本節では、モシカスルト類とコトニヨルト類に関して、図1で見たように、モシカスルト類が戦前期以降増加したのに対し、それに対応するかのようニコトニヨルト類が減少していったという、この両副詞の対照的な出現傾向に関して考察を加えたいと思う。

まず、図3および表1、表2より、両副詞の中心的な共起形式は以下のようによまとめられる。

明治期 コトニヨルト類(表2) - カモシレナイ
 モシカ・モシヤ(表1) - (ノ)デハナイカ・その他のカ類

- 戦前期 コトニヨルト類-カモシレナイ
 モシカ・モシヤ- (ノ) デハナイカ
 /モシカスルト類 (図3) -カモシレナイ
- 戦後期 (コトニヨルト類) - *
 (モシカ・モシヤ) - *
 /モシカスルト類-カモシレナイ・(ノ) デハナイカ

このようにして見ると、明治期には“コトニヨルト類-カモシレナイ”“モシカ・モシヤ- (ノ) デハナイカ”といったような、いわば“棲み分け”のような状態であったのが、戦前期以降にモシカスルト類が成立するとその棲み分けのバランスが崩れ、戦後期に至ってモシカスルト類がコトニヨルト類およびモシカ・モシヤを凌駕していった様相が浮かび上がる。

では、なぜこのようにモシカスルト類は他の副詞を圧倒できたのであろうか。すでにモシカ・モシヤとの関連については前節で述べたので、ここではコトニヨルト類との関係について、考察してみたい。

コトニヨルト類との競合において、モシカスルト類が残った理由として考えられることには、まずモシカスルト類の方が、コトニヨルト類よりも命題の制約が小さかったということが考えられる。

本稿での対象副詞は「可能性想定¹のモダリティ副詞」であり、これは〈命題が成立する可能性を想定する副詞〉と言い換えることができる(2章参照)。コトニヨルト類が取る命題は、現実のことがらとして確認や証明が可能な命題と言えるようなものに限られるようである。

- (31) 〈略〉、ことによつたら、今日きりで君に會ふ機会がなくなるかも知れないから、今夜の會見の形勢によつては僕が門司(地名；筆者注)へ行くかも知れんぞ、(人生劇場160上)
- (32) ことによれば、由希子の相手は、それがどんなに秀れた人間でも、私の気には入らぬのかも知れないと、自分にも思えてくる。(立ち盡す明日136)

例31は、「今日きりで君に會ふ機会がなくなる」という事態が現実のことがらとなるかどうかは、時間にかかるかもしれないが、結果的に確認することは可能である(たとえば、話者が「君」のどちらかが死亡した時など)。また、

例32においては、発話時点では話者が「由希子の相手」がどんな人間であろうと気に入らないと思っているが、将来においては話者の気に入る「由希子」の相手が現われる可能性も考えられるわけであるから、その意味で現実の問題として確認することは可能だと言える。

これに対し、モシカスルト類が取る命題は、現実的に確認や証明が可能な命題も取れば（例33）、現実のことがらとして確認・証明することが不可能と思われるような命題も取ることができる（例34,35）という違いが見られる。

- (33) 「若しかしたら、お澄も、京都へいつてるかもしれないわ」（雪夫人絵図35上）
- (34) もしかすると地球とほかの天体との間に架せられて止む間ない運動をつづけている大鞆オビホルンがあり、彼はうつかりしてその横木に尻をかけたのかも知れないのだ……。 (若い人85上)
- (35) 〈略〉、いつも私は目覚める度にいったん死んでから生きかえったように思えるくらい深く眠るし、もしかしたら寝ている自分を外から見るとまっ白な骨なのではないかと思う時がある。(白河夜船53)

例33においては、「お澄」が京都に行っているかどうかは、現実の問題として確認が可能である。しかし、例34や例35のように、地球と他の天体に架けられた大鞆オビホルンの存在や寝ている時の自分が骨であるというようなことは、現実のことがらかどうかとして確認することは不可能であろう。

例34,35のモシカスルト類をコトニヨルト類に交替できると感じる日本語母語話者もいるかもしれないが、本稿から得られた用例からでは、そのようなコトニヨルト類の用例は見られなかったことから、ここではひとまずこのような違いを指摘しておきたい。

このように、コトニヨルト類は、具体的に実現可能な状況・場面を前提とした命題が成立することを想定した副詞であると考えられるのに対し、モシカスルト類にはそのような制約は認められないという点で、モシカスルト類の方が用法に幅があるものと考えられる^{〔*29〕}。このような用法の幅の違いが、モシカスルト類とコトニヨルト類の使用傾向に差異を生じさせた一要因であると考えられる^{〔*30〕}。

また、モシカスルト類といった新たな表現の出現により（7.1参照）、コトニヨルトが古い語感を持つ語といった位置づけになってしまい、〈可能性想定〉

の場合にはモシカスルトが多く用いられるようになっていったという可能性も想定できる。

8. おわりに

本稿で得られた知見について、まとめておく。

対象副詞の全体的な傾向としては、モシカスルト類とコトニヨルト類が対照的な出現傾向が見られた。すなわち、モシカスルト類は現代期になるにつれ増加する傾向が見られたのに対し、コトニヨルト類は減少する傾向にあった（現代期では用例が見られなかった）。また、ヒョットスルト類は、全時期を通じて3割程度を占めており、変動はあまり見られなかった。なお、モシカスルト類は、明治期においてはモシカ・モシヤという形式であり、モシカスルト類は、本稿での戦前期に出現・一般化していったものと推察できる。

共起形式との共起パターンについては、ある程度の用例数が得られたモシカスルト類とヒョットスルト類について述べた。まず、モシカスルト類はカモシレナイ、(ノ)デハナイカ、その他のカ類といった共起形式が時期の変遷に伴い段階的に増加していることから「累加型」のモダリティ副詞と位置づけられた。ヒョットスルト類は、特に戦前期以降はカモシレナイと(ノ)デハナイカでほぼ安定した共起形式となっていることから、「共立型」のモダリティ副詞と位置づけられた。なお、コトニヨルト類は用例数が少なく、どの型に該当するかの判断が難しかったので、今後の課題としておきたい。

注

- *1 対象副詞を“副詞的”と見る研究には、益岡・田窪（1992）や森田（2002）などがある。益岡・田窪（1992：100）では「陳述の副詞に相当する句」としてモシカスルトとヒョットスルトを、森田（2002：113）では「句形式をとる副詞」の下位類として「句形式をとる接続語」を据え、ヒョットシタラ、コトニヨルト、モシカスルトを挙げている。また、森田（2002：111-112）では、「陳述副詞」の下位類「仮定条件意識を導く」にヒョットシテを入れている。
- *2 〈命題成立の可能性が「低い」ことを表わす〉という見方に立った場合では、タブンやキットなどとの連続性でモシカスルト類やヒョットスルト類などを捉えている。しかし、〈命題成立の可能性を仮定する〉という見方に立った場合、この連続性に関する議論は解消されることになる。杉村（1998）参照。

- * 3 杉村 (1998), 工藤 (2000), 和佐 (2001) などでは, アルイハも関連させて考察しているが, 接続詞としての用法との絡みを考慮し, 考察の対象外とした。本稿では, 〈モシカ・ヒョット・コトニ+動詞の活用形+助詞〉といった構成を持つ形式を対象とする。
- * 4 同書の凡例によると, 「本辞典の編纂法は, 先づ現代の普通語を以て本項を立て, 之が類語を其條下に纂輯し, 〈以下略〉」とあることから, 立項されている語は編者が当時の「普通語」と見なしたものであると考えられる。
- * 5 これらの時代区分については, 小池 (2002 b) 参照。
- * 6 「その他」に含まれる形式は, 以下の通りである; 明治期: モシ (3例), モシモ (1例) / 戦前期: モシ / 戦後期: モシカスレバ。図1においては, 戦後期のモシカスレバは数え入れられている。
- * 7 宮崎 (1997) では, モシカスルト・モシカシタラ・モシカシテを「変種と見てよいだけの類同性を有するものの, それぞれに用法や機能が完全に同一であるわけではない」とし, モシカシテが間いかけの文で使いやすかったり, 伝聞のソウダの補文へ出現できたりする点で, 他の語とは異なるようであると述べている。

また, モシカスルト・モシカシタラ・モシカシテの使われ方の違いは, 方言の影響の可能性も考えられる。仮定表現で使われるバ・ト・タラ・ナラの地域的な使用差については, 真田 (1983, 1989) や田尻 (1992) で報告されている。そこでは, 「万一という場合」(真田1989: 42) を表わす仮定表現では, 各地ともタラが多用される傾向にある。また, 「ことがらの実現を単に仮定する場合」(真田1989: 42) の表現では, 東京ではナラ, 大阪ではタラが圧倒的に多用され, 福岡ではタラが比較的に多用されている。

本稿の資料では, 戦前期に東京出身作家1名/その他8名, 戦後期に同7名/8名, 現代期に同6名/11名であったので, 戦後期および現代期について, 東京出身作家とその他の地域出身作家のスルト・シタラ・シテの違いを(ヒョット類も併せて)確認したが, 東京出身作家特有の傾向といったものは認められなかった。

本稿の資料は作品主体の立場で選定したので, 作家の出身地に主眼においた資料選定および分析をすれば, また違った結果が得られるかもしれない。

- * 8 菊池寛より「火華」(1922), 「真珠夫人」(1925), 「第二の接吻」(1925), 「赤い白鳥」(1927), 「東京行進曲」(1928) の5作品を選定したが, 「火華」(1例) と「真珠夫人」(2例) ではモシヤのみが使われていたのに対し, 「第二の接吻」以降の作品ではすべてモシカスルト (全8例) が用いられていた。
- * 9 宮崎 (1997) では, モシカスルト・モシカシタラ・モシカシテ/ヒョットスルト・ヒョットシタラ・ヒョットシテを「モシカスルト」類としている。
- * 10 浅野 (1943: 606) では, コトニヨルトは立項されている。そこでは, 「別語

『ひよつとすると』にあたり、物事の不確で場合によつては變化變動があらうといふ見込の上にいふ。』という解釈が与えられている。これは、本稿での「可能性想定」すなわち（命題成立の可能性を仮定する）という立場と近いものと見なせる。

- *11 ヒョットスルト類には、仮定条件節で用いられている例は見られる。このような例は対象外とした。
 (*11-1) 「其代り、^{ひよつと}偶としてお前が^{あと}後になるやうだつたら、俺は死んでも……魂は……おまへの陰身を離れないから、必ず心變を……す、するなよ、お静」(續々金色夜叉84)
- *12 カモシレナイには、以下の諸形式も含む。カモシレン(ヌ・ズ)・カモシレナカッタ・カモシレナイデショウ・カモワカラナイ・カ知ラナイ・モ知レヌ(下例)・カモ。この中には、カモワカリマセンのように丁寧語形となっている場合のものも含んでいる。
 (*12-1) けれど、若し男が早く訪ねて来ようも知れぬ、斯様な臥て居る態を見らるゝのも恥しい、と思つて徐に床を出た。(魔風戀風291上)
- *13 (ン) ジャナイカ・デハアルマイカ・デハナカロウカ、(ノ) デハも含め、また明治期に見られたニハアラザルカなどもここに含めた。
 (*13-1) 若しや此近傍の悪者が夜に乗じて鷹の島へ物盗みに至りしにはあらざるか、(小猫69)
 なお、安達(1999)ではノデハナイカとデハナイカの相違について言及しているが、本稿での調査ではノデハナイカは用言に後接し、デハナイカは体言に後接しているという違いがあるだけで、意味的には違いは認められなかったもので、双方を同じものと見なして分析する。
- *14 宮崎和人氏は、宮崎ほか(2002:138)でも、「閉き手に情報を要求するというより、話し手自身の推量判断の未成立状態を表すことにその本質がある疑問形式である」と述べている。
- *15 宮崎(1997)では、「疑いの文」を「命題を真とすることに話し手が疑いを持っていることを表明する文」と規定している。
- *16 具体例として、「この分じゃ、明日も雨だろうか。」が挙げられている。
- *17 宮崎ほか(2002:140)でも、「考えうる可能性の中から1つに絞り込んだ段階を提示する」とある。
- *18 田野村(1990)の分析においても、「推定」という概念が用いられている。
- *19 国立国語研究所(1960)の「判定要求の表現」と近い概念である。また、この〈質問〉は、いわゆる Yes-No 疑問文である。
- *20 例17のように(ノ)ダロウカという形式はこの例文だけであつたので、カに含めることとした。なお、ダロウカとカの違いについては、仁田(1991)、安達(1999)参照。

- *21 一語文については、小池 (2002) を参照。
- *22 図3における「その他」には、疑問の助詞ノを共起させた例をはじめ、以下のような例が含まれる。
- (*22-1) 「もしかして、あなたのトマトもコンテナ一杯で七百五十円を出しているの？」(女たちのジハード429)
- (*22-2) 「もしかして今夜あなたも駅前でアンケートされた？」(アムリタ27)
- (*22-3) 「仕事？」 寺石は鸚鵡がえしにきいた。「そう、金貸業者を踏み倒す仕事です。もしかしたら、これは、立派な職業です」(白い罌粟27)
- *23 表2における「その他」は、以下のような例である。
- (*23-1) 博士は父を顧み「今日は衆議院で演説でもなされますか」伯「ウム、殊に依ると自分で何か言はなければなるまい」(小猫193)
- (*23-2) 素人考へではあるが、(娘婿の金吾は) 病氣が未だ初期だから、事によると、又何ういふか動機で偶と以前の頭腦に歸らんとも限らん。(五人姉妹183下)
- (*23-3) 「そういうものじゃないのよ、結婚なんて〈中略〉実際は、つき合いながら段々に、この人でうまく行くかな、駄目かなって考えたり、ことによったら、むこうの人はどうなんだろうって迷ったり、いろんなことをしているうちに、何となくそうなるのよ。(立ち盡す明日63)
- *24 図4における「その他」は、以下のような例である。
- (*24-1) 綾子さん、私やどうしまうね。ひよつとすると、もう綾子さんと別れなけりやアならなくつてよ。(乳姉妹136下)
- (*24-2) 〈これならひよつとするとうまく行く〉(青春の門104)
- (*24-3) ひよつとして、達也、37才になるうってのに、まだ独身？ 私のことが忘れられなくて？(ビタミンF205)
- *25 累加型、共立型、呼応型に関しては小池 (2002a, b) を、漸減型に関しては小池 (2002b) を、そしてモダリティ呼応型およびムード呼応型に関しては小池 (2003) を参照のこと。
- *26 小池 (2002a) では「共起形式累加型の副詞」と呼んでいるが、その定義は同じである。
- *27 小池 (2002a) では「共起形式共立型の副詞」と呼んでいるが、その定義は同じである。
- *28 このような想定他に、モシが〈仮定条件〉のみになったのだから、モシカ・モシヤは〈可能性想定〉のみとして定着するという流れも考えられる。図2を見ると、現代期においてもモシヤが用いられていることなどから、完全にモシカスルト類に移行したわけではないと言える。しかし、大局的に見ると、やはり〈可能性想定〉を表わす新たな形式としてモシカスルト(類)が出現したと言えるのではないだろうか。

*29 ただし、コトニヨルト類が、「場合によると」のような意味で解釈される場合には、モシカスルト類に言い換えると不自然になると思われる。

(*29-1 a) そんな風にきり出して、話の進行中、ことによつたらどなってみよう。それで泣いたら、しめたものだ。(雑居家族77上)

(*29-1 b) ? そんな風にきり出して、話の進行中、モシカシタラどなってみよう。

(以下略)

本稿での調査では、このような用例は数的にあまり多く見られなかったので断言は避けるが、このように言い換えができないのは、共起形式が〈可能性想定〉を表わす形式ではない場合に起こるようである(5章の例18も同様のものと見なせる)。

*30 作者の違いにより、モシカスルト類とコトニヨルト類を使い分けているかについて確認しておく、今回の調査でコトニヨルト類のみを用いていた作家は、戦後期の柴田翔(『立ち盡す明日』1971; 4例)だけであった。ちなみに、同作品にはヒョットスルト類の用例も見られなかった。

資料一覧 以下のリストは順に〈作品名、初版出版年、作家名、生(没)年; テキスト、テキスト出版年、テキスト出版社; 〈概算文字数〉を表す。

明治期の作品(17): 約3,034,147字 ●「小猫」1891, 村井弦齋(1863-1927); 『大悲剧名作全集第四卷 小猫』1935, 中央公論社; 322,168 ●「金色夜叉」1898, 尾崎紅葉(1867-1903), 春陽堂; 『精選名著復刻全集 金色夜叉』(前編1898・中編1899・後編1900・續編1902・續々編1903)1979, 日本近代文学館; 271,203 ●「不如帰」1898, 徳富蘆花(1868-1927); 『明治大正文学全集 第十三卷 徳富蘆花』1930, 春陽堂; 143,520 ●「無花果」1901, 中村春雨(1877-1941); 『現代日本文学全集 第三十四篇 歴史・家庭小説集』1928, 改造社; 133,560 ●「錦木」1901, 柳川春葉(1877-1918); 『明治文学全集22 硯友社文学集』1969, 筑摩書房; 61,824 ●「秋裕」1902, 柳川春葉; 『明治文学全集22 硯友社文学集』1969, 筑摩書房; 26,880 ●「濱子」1902, 草村北星(1879-1950); 『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房; 152,320 ●「魔風戀風」1903, 小杉天外(1865-1952); 『明治大正文学全集 第十六卷 小杉天外』1930, 春陽堂; 311,480 ●「黒潮 第一篇」1903, 徳富蘆花, 黒潮社; 『徳富蘆花集 第7卷』1999, 日本図書センター; 203,034 ●「乳姉妹」1903, 菊池幽芳(1870-1947); 『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房; 272,384 ●「良人の自白 上篇」1904, 木下尚江(1869-1937); 『明治文学全集 45 木下尚江集』1977, 筑摩書房; 177,408 ●「女夫波」1904, 田口鞠汀(1875-1943); 『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房; 222,208 ●「青春 春之巻・夏之巻」1905, 小栗風葉(1875-1926); 『明治大正文学全集 第十七卷 小栗風葉』1928,

春陽堂；238,680 ●「琵琶歌」1905, 大倉桃郎(1879-1944)；『明治家庭小説集』1969, 筑摩書房；94,080 ●「コブシ 前篇」1906, 小杉天外；『明治大正文學全集 第十六卷 小杉天外』1930, 春陽堂；124,280 ●「寄生木 上篇」1909, 徳富蘆花；『徳富蘆花集 第9卷』1999, 日本図書センター；158,998 ●「生さぬ仲 前篇」1912, 柳川春葉；『明治大正文學全集 第19卷 柳川春葉 佐藤紅緑』1929, 春陽堂；120,120

戦前期の作品(15)：約3,346,080字 ●「渦巻」1913, 渡邊霞亭(1864-1926)；『大悲劇名作全集第八卷 渦巻』1934, 中央公論社；551,650 ●「五人姉妹」1915, 柳川春葉；『現代日本文學全集 第五十五篇 小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931, 改造社；140,616 ●「宿命」1918, 沖野岩三郎(1876-1956)；『近代日本キリスト教文學全集 5』1975, 教文館；243,880 ●「火華」1922, 菊池寛(1888-1948)；『菊池寛全集 第五卷 長篇小説集一』1994, 文藝春秋；254,982 ●「空華」1922, 久米正雄(1891-1952)；『現代小説全集 第五卷』1926, 新潮社；144,000 ●「破船 前篇」1922, 久米正雄；『現代日本文學全集 第三十二篇 近松秋江集・久米正雄集』1928, 改造社；173,880 ●「緑の路」1925, 小栗風葉；『現代日本文學全集 第五十五篇 小栗風葉集・柳川春葉集・佐藤紅緑集』1931, 改造社；147,420 ●「真珠夫人」1925, 菊池寛；『菊池寛全集 第五卷 長篇小説集一』1994, 文藝春秋；351,624 ●「第二の接吻」1925, 菊池寛；『菊池寛全集 第七卷 長篇小説集三』1994, 文藝春秋；162,656 ●「赤い白鳥」1927, 菊池寛；『菊池寛全集 第七卷 長篇小説集三』1994, 文藝春秋；149,500 ●「東京行進曲」1928, 菊池寛；『菊池寛全集 第八卷 長篇小説集四』1994, 文藝春秋；184,314 ●「かんかん虫は唄う」1930, 吉川英治(浜帆一)(1892-1962)；『吉川英治全集 10』1983, 講談社；131,600 ●「あるぶす大将」1933, 吉川英治(浜帆一)；『吉川英治全集10』1983, 講談社；190,568 ●「人生劇場」1933, 尾崎士郎(1898-1964)；『日本現代文學全集72 尾崎士郎・坪田譲治集』1962, 講談社；287,100 ●「若い人 前篇」1933, 石坂洋次郎(1900-86)；『日本現代文學全集86 石坂洋次郎・石川達三集』1961, 講談社；232,290

戦後期の作品(17)：約3,001,811字 ●「土曜夫人」1946, 織田作之助(1913-47)；『定本 織田作之助全集 第七卷』1971, 文泉堂書店；142,272 ●「地底の歌」1948, 平林たい子(1905-72)；『新選 現代日本文學全集18 平林たい子集』1959, 筑摩書房；117,327 ●「石中先生行状記」1949, 石坂洋次郎, 新潮社, 初版本；231,880 ●「雪夫人絵図」1950, 舟橋聖一(1904-76)；『新選 現代日本文學全集14 舟橋聖一集』1958, 筑摩書房；230,433 ●「武蔵野夫人」1950, 大岡昇平(1909-88)；『日本文學全集64 大岡昇平集』1962, 新潮社；146,616 ●「風ふたたび」1951, 永井龍男(1904-90)；『永井龍男全集第5卷』1981, 講談社；167,328 ●「雑居家族」1955, 壺井栄(1899-1967)；『壺井栄全集7』1998, 文泉堂出版；171,840 ●「四十八歳の抵抗」1956, 石川達三(1905-85)；『昭和国民文學全集

27 石川達三集】1979, 筑摩書房; 218,504 ●【おとうと】1957, 幸田文(1904-90), 中央公論社, 5版1957.11.25(初版1957.9.27); 164,475 ●「江分利満氏の優雅な生活」1961, 山口瞳(1926-1995); 『新潮現代文学58 江分利満氏の優雅な生活・人殺し』1980, 新潮社; 129,272 ●【白い罌粟】1965, 立原正秋(1926-80); 『立原正秋全集 第三巻』1983, 角川書店; 81,900 ●【奇病連盟】1966, 北杜夫(1927-); 『北杜夫全集 7』1977, 新潮社; 200,278 ●【蒼ざめた馬を見よ】1967, 五木寛之(1932-); 『昭和文学全集 第26巻』1988, 小学館; 53,460 ●【さびしい王様】1969, 北杜夫, 新潮社, 初版本; 348,480 ●【青春の門 第二部 自立篇上】1971, 五木寛之, 講談社, 初版本; 208,170 ●【立ち盡す明日】1971, 柴田翔(1935-), 新潮社, 初版本; 122,976 ●【恍惚の人】1972, 有吉佐和子(1931-84), 新潮社, 初版本; 266,600

現代期の作品(19): 約3,245,717字 ●【雨やどり 新宿馬鹿物語一】1975, 半村良(1933-2002), 河出書房新社, 初版本; 119,040 ●【エーゲ海に捧ぐ】1977, 池田満寿夫(1934-97), 角川書店, 初版本; 108,300 ●【離婚】1978, 色川武大(1929-89), 文藝春秋, 初版本; 90,371 ●【人間万事塞翁が丙午】1981, 青島幸男(1932-), 新潮社, 初版本; 200,466 ●【なんとなく, クリスタル】1981, 田中康夫(1956-), 河出書房新社, 23版1981.2.26(初版1981.1.20); 64,610 ●【恋文】1984, 連城三紀彦(1948-), 新潮社, 初版本; 148,608 ●【旅の幻燈】1986, 五木寛之, 講談社, 初版本; 224,010 ●【塀の中のプレイ・ボール】1987, 安部譲二(1937-), 講談社, 初版本; 129,948 ●【熱れてゆく夏】1988, 藤堂志津子(1949-), 文藝春秋, 初版本; 127,194 ●【白夜夜船】1989, 吉本ばなな(1964-), 福武書店, 初版本; 108,654 ●【うたかた 上】1990, 渡辺淳一(1933-), 講談社, 初版本; 205,884 ●【緋い記憶】1991, 高橋克彦(1947-), 文藝春秋, 初版本; 213,624 ●【受け月】1992, 伊集院静(1950-), 文藝春秋, 初版本; 183,438 ●【アメリカ 上】1994, 吉本ばなな, 福武書店, 初版本; 176,640 ●【失樂園 上】1997, 渡辺淳一, 講談社, 初版本; 231,420 ●【女たちのジハード】1997, 篠田節子(1960-), 集英社, 初版本; 381,840 ●【プラナリア】2000, 山本文緒(1962-), 文藝春秋, 初版本; 178,364 ●【ビタミンF】2000, 重松清(1963-), 新潮社, 初版本; 208,206

参考文献

- 浅野 信(1943)『日本文法辞典 口語篇』, 八弘書店
 安達太郎(1999)『日本語研究叢書11 日本語疑問文における判断の諸相』, くろしお出版
 庵 功雄(2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』, スリーエーネットワーク
 岡本禹一編(1944)『日本語表現文典』, 国際文化振興會

- 工藤 浩 (2000) 「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』：161-234, 岩波書店
- 小池清治 (2002) 「日本語で一番短い文は何か?」, 小池清治・赤羽根義章『シリーズ〈日本語探求法〉2 文法探求法』：51-59, 朝倉書店
- 小池 康 (2002 a) 「副詞の共起形式に関する史的変遷-推量のモダリティ副詞を中心に-」『日本語科学』12：48-71, 国立国語研究所
- (2002 b) 「現代日本語におけるモダリティ副詞マサカの意味と用法の変遷」『文藝言語研究 言語篇』42：13-36, 筑波大学文芸・言語学系
- (2003) 「比況のモダリティ副詞の史的変遷-マルデを中心に-」『計量国語学』23-8：387-406
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型(1) -対話資料による研究-』, 秀英出版
- 真田信治 (1983) 『日本語のゆれ-地図で見る地域語の生態-』, 南雲堂
- (1989) 『日本語のバリエーション 現代語・歴史・地理』, アルク
- 島本基編 (1989) 『日本語学習者のための副詞用例辞典』, 凡人社
- 杉村 泰 (1998) 「真偽判断を表すモダリティ副詞「モシカスルト」, 「ヒョットスルト」の研究」『日本語教育』98：25-36
- 田尻英三 (1992) 「日本語教師と方言」『日本語教育』76：9-20
- 田野村忠温 (1990) 『和泉選書48 現代日本語の文法I 「のだ」の意味と用法』, 和泉書院
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法-改訂版-』, くろしお出版
- 松村 明 (1998) 『増補 江戸語東京語の研究』, 東京堂出版
- 三宅知宏 (1995) 「カモシレナイとダロウ-概言の助動詞③-」, 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上) 単文編』：197-200, くろしお出版
- 宮崎和人 (1997) 「「モシカスルト」類について」『岡山大学言語学論叢』5：1-33
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』, くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店
- (2002) 『日本語文法の発想』, ひつじ書房
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版
- 吉川泰雄 (1969) 「か-終助詞〈現代語〉」, 松村明編『古典語現代語助動詞助動詞詳説』：615-621, 學燈社
- 和佐敦子 (2001) 「日本語とスペイン語の可能性判断を表す副詞」『言語研究』120：67-88